

ションの経過から接着性レジンセメントを応用した固定性橋義歯による補綴処置を行った。術前と術後の状態をX線写真、顔貌、下顎運動記録により確認し、患者の満足も得られ、良好な経過を得ている。

演題7. インプリントカルチャー改良法によるカンジダの検出

○高橋 義和, 青木 一, 橋爪 正一
熊谷 英人, 松村 猛, 清野 和夫
石橋 寛二, 金子 克*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座*

デンチャーブランクの評価法として応用されているインプリントカルチャー法は、ボクシングした義歯に注入する培地の温度がカンジダの生育上限温度より高いこと、局部床義歯への応用が困難であること、操作が煩雑であることなど多くの課題を有していた。そこで、これらの点に改良を加えたインプリントカルチャー改良法を考案した。本法は加温溶解した培地をシャーレに注入して38℃まで放冷し、その中に義歯を埋入させ、培地が硬化後、義歯を撤去して培養する方法である。今回は本法の術式を紹介

するとともに、培地温度の違いによるカンジダ検出能についてインプリントカルチャー法と比較検討した。

実験方法と結果：義歯性口内炎患者から分離した *Candida albicans* serotype A を培養、希釈した菌液を実験用義歯床に付着させ、培地温度が50℃のインプリントカルチャー法と、38℃のインプリントカルチャー改良法の術式に従い培養し、出現コロニー数を測定した。その結果、出現コロニー数の Mean ± S.E. は、インプリントカルチャー法が 2.8 ± 0.7 、インプリントカルチャー改良法では 127.5 ± 11.2 であった。このことから、*C. albicans* は、短時間であっても50℃の温度に接することにより、生育に影響を受けることが示された。培地温度を可及的に低くしたインプリントカルチャー改良法は、義歯床粘膜面に付着したカンジダの検出能が優れていた。

結論：インプリントカルチャー改良法を考案し、検討したところ以下の特徴が認められた。

- ①培地温度によるカンジダへの得響が少ない
- ②局部床義歯への応用が容易である
- ③無菌操作が容易である
- ④ボクシングの必要性がない
- ⑤培地の補強が必要ない
- ⑥操作時間が短縮される

次号誌（第13巻1号）について

投稿締切 昭和63年2月15日

発行予定日 昭和63年4月30日

本号誌346頁の投稿の手引きに従ってご執筆下さい。所定の原稿用紙、投稿票、チェック票は学会事務局に備えてありますのでお申し出下さい。

岩手医科大学歯学会編集委員会